

ネガティブな自己確証における測定尺度の作成と 青年期の気分状態と精神的健康に及ぼす影響

中 森 理 菜

(神奈川大学大学院 人間科学研究科 人間科学専攻 臨床心理学研究領域)

*A Study for Scale Development of Negative Self-Verification
and the Influence on the Mood and the Mental Health in Adolescence.*

問題・目的

近年、青年期は、様々な選択を迫られる青年期において抑うつ状態を引き起こしやすいことが知られている。自己概念を確証、確認してくれるような社会的現実を、実際の社会的環境と自分自身の心の中に作り出す自己確証 (self-verification) を提唱した Swann (1983) は、抑うつ傾向者の自己確証において、非抑うつ傾向者と比べ、自己に関する否定的な評価を好むことを見出した。また、自己概念が否定的な被験者は、自分に対し否定的な評価をする評価者を好み、肯定的な評価をする評価者を好まない、という対人印象についての結果も出されており (Swann, Stein-Seroussi, & Giesler, 1992)、日本でもこの結果を支持する研究が発表されている (稲葉・中谷, 2004)。アイデンティティの形成において、自己評価の低い個人にのみ否定的な自己確証を行う傾向が見られ、精神的健康が低いことがわかっている (長谷川・浦, 1998)。また、低自尊心者が親密な同性の友人に対して安心さがしを行うほど、その友人から拒絶されているという認知が高まることが示された (長谷川, 2008)。このように、抑うつ傾向者の対人行動傾向と精神的健康の関連について新たに研究されるようになり、貴重な研究結果と言える。しかし、Swann の研究では、ネガティブな自己確証をどれほど好むかを測定する尺度が作成されていない。

そこで本研究では、重要他者から自らについての否定的な評価をどの程度求めるのかを測定する尺度を作成し、抑うつや自尊心など精神的健康との関係を検討することを目的とした。さらに、「ネガティブな自己確証を好む者が、自己に対してポジティブな評価をされると、認知と情緒の板挟みが起き、複雑な気分になる」という仮説のもと、ポジティブな評価をされたときの気分の変動を調査した。

目的1：ネガティブな自己確証をどの程度志向するかを測定する、ネガティブな自己確証尺度を作成することを目的とする。

目的2：ネガティブな自己確証が青年期の精神的健康に影響を与えるというモデルを検討することを目的とする。

方法

研究1 ネガティブな自己確証尺度の作成

対象関係尺度（青年期用）（井梅・平井・青木・馬場（2006）「居場所」の心理機能測定尺度（杉本・庄司，2006）などを参考に，自分にとって重要な他者から，自らについての否定的な評価をどの程度求めるのかを測定する項目を作成した。大学生175名（男性66名，女性109名）を対象に，一番近い人を想定させ，その人との間柄を記入する質問項目を含めた質問紙調査を行い，因子分析（ $n=168$ ，主因子分解，プロマックス回転）を行った。その結果，3因子，12項目の尺度が作成された。抽出された因子は“称賛非受容性”，“低評価受容性”，“欠点認知欲求”であった。また，内的整合性（ α 係数=.74～.65）を検討し，一定の信頼性も備えていると考えられた。

研究2 ネガティブな自己確証と，抑うつ，自尊感情，気分状態の変化との関連

調査対象者・調査方法：私立大学に通う大学生175名（男性66名，女性109名）を対象とし，質問紙調査を実施した。平均年齢は20.18歳（ $SD=1.30$ ）。

調査内容：①性別，年齢，②ネガティブな自己確証尺度（研究1において作成された），12項目，5件法。③自尊感情尺度：自己全体への評価を測る Rosenberg（1965）の自尊感情尺度の邦訳版（山本・松井・二成，1982）10項目，5件法。④抑うつ尺度 SDS: Self-Rating Depression Scale（Zung, 1965）の日本語版（福田・小林，1973）20項目，4件法。⑤パラノイア感・抑うつ感尺度（杉山，2018）：15項目，5件法。⑥気分状態尺度：Ⅰ．日常的気分を測定するため，SD法的質問紙を用いて測定。質問紙の項目は，高山典子氏が作成した尺度を使用（高山，1989）。7項目，7段階評定法。Ⅱ．『身近な人があなたをほめてくれるとしたら，どのような言葉をかけてくれそうですか？ 思いつくものを，できれば5つ以上書き出してください。』という教示文のもと記入してもらい，その後に『上記のようにほめられ続けたら，どのような気分になりますか？』という教示文のもと，Ⅰと同じようにSD法的質問紙を用いて気分状態の変化を測定。

分析：t検定，相関分析，共分散構造分析を行った。主に共分散構造分析の結果と考察を記す。

研究2の結果と考察

共分散構造分析から，Figure1, Figure2のモデルが見出された（次ページ参照）。

称賛非受容性はすべての精神的健康指標に影響が見られ，先行研究の示唆と一致する結果となった（長谷川，2008）。ネガティブな自己確証は，抑うつと関連があるという先行研究（Swann, Stein-Seroussi, & Giesler, 1992）を支持しただけでなく，他の精神的健康にも影響があることが明らかになった。

低評価受容性については，パラノイア感と認知と情緒の板挟み状態における気分の複雑さに対して正の影響があり，精神的不健康な影響が見られることが示唆された。パラノイア感

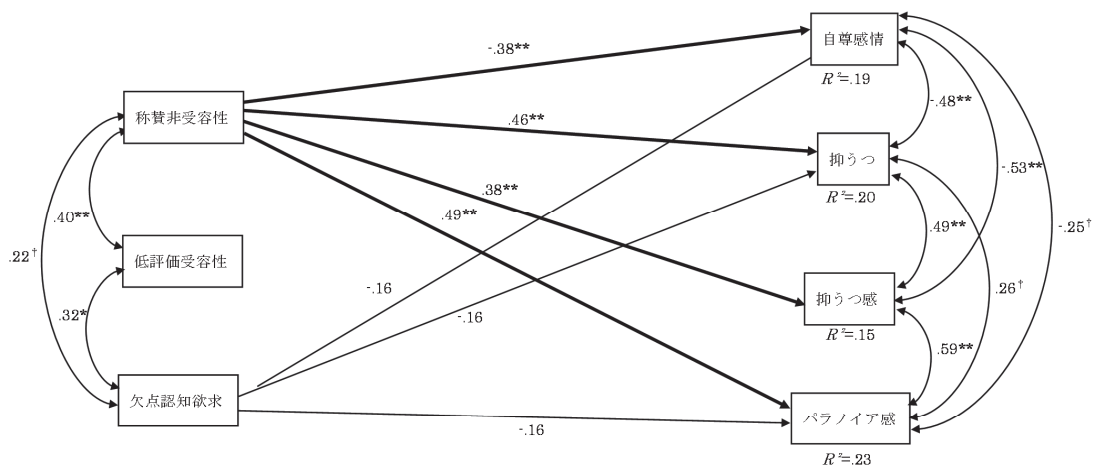
との関連については、男女ともに自己関係づけに他者意識と個人志向性が関連しているが、大学生になると、男子は他者意識に加えて自尊心が被害妄想的思考と関わりをもち、男女によって被害妄想的思考への関係のあり方に異なる傾向が見られるという結果を示した先行研究（金子，2000）から、女性においては他者意識と個人志向性のみが被害妄想的思考に関係するため、他者評価がパラノイア感に影響を及ぼすことが考えられる。認知と情緒の板挟み状態における気分の複雑さとの関連については、女性は男性よりも自己卑下的な自己提示をするという研究結果から（橋本・山岸，2008）、日常的に自己卑下的な自己提示をする傾向がある女性は、褒められると自己概念を揺るがされ、抵抗感が生じられることが考えられる。

欠点認知欲求については、精神的健康と気分状態に関係が見られない結果となった。これは、自身の欠点を提示することで周囲の厚意を引き出してその場の環境に適応するため、自身の欠点を他者に知られることは個人の気分と精神的健康にネガティブな影響を及ぼさない可能性がある。ネガティブな自己確証の第3因子に関しては、ネガティブな自己確証における認知的欲求面において、今後さらなる検討が必要だと思われる。

今後の展望

今回の研究で作成された尺度とモデルは、対人関係による精神的不適応を改善するサポートを考える際に参考になるのではないかと予想される。また、本研究で、ネガティブな自己確証傾向にある者は過剰に褒められても素直に受け入れられず、気分の複雑さが生じることが示唆されたことから、ネガティブな自己概念を持つ者を対象に、安心できる環境のもとで相手の自己観に対して適切なフィードバックを与えるなど、丁寧な関わりに関する検討が進められると思われる。さらに、ネガティブな自己確証を好むことは時に抑うつ的になるが、気分の高揚を避けることが適応的な生き方の一つとしてあるかもしれない、と筆者は考えるようになった。抑うつは多く人々を悩ませる問題とされているが、その予防・軽減は生き方や価値観の問題も含めて多面的に検討する必要があると考えられる。

字数制限により引用文献は省略。

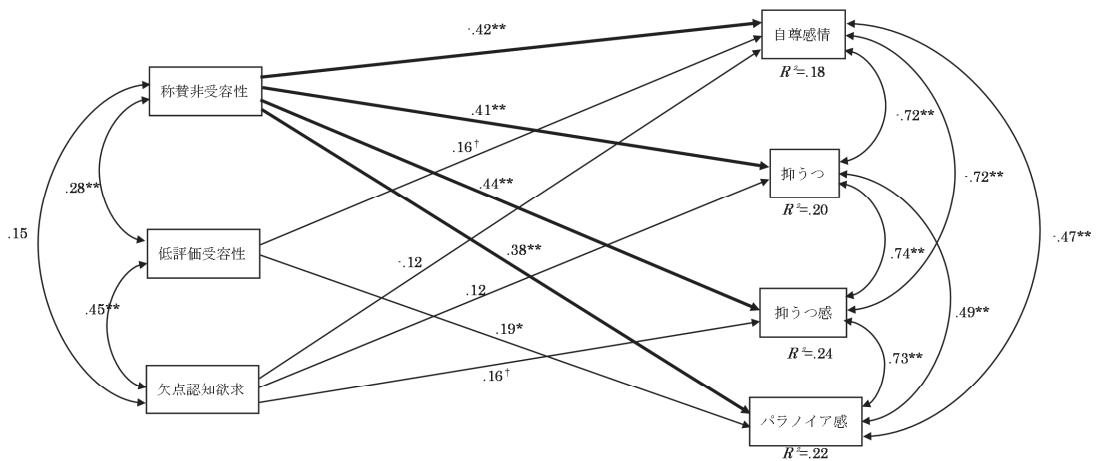


GFI=.997, AGFI=.979, RMSEA=.000, AIC=-9.2646

**= $p<.01$, *= $p<.05$, †= $p<.10$

注1) 片パスは偏回帰係数, 両パスは相関係数を示す

Figure1 各種適応指標を基準にしたモデル① (男性 n=51)



GFI=.997, AGFI=.9714, RMSEA=.000, AIC=-4.9123

**= $p<.01$, *= $p<.05$, †= $p<.10$

注1) 片パスは偏回帰係数, 両パスは相関係数を示す

Figure2 各種適応指標を基準にしたモデル② (女性 n=102)